Off Time
オフタイム

ホームレス支援から考える
「何度でもやり直せる社会」

ある日、通学電車の窓から見えたホームレスの人たちの行列。なんの列？なんであんなに「ホームレス」いるんやろ？
「日本って豊かな国なのに、どうしてホームレスになるんだろう」。１４歳の中学生の頭の中には「？」がいっぱい。

１４歳で“おっちゃん”と出会ってから、
１５年考えつづけてやっと見つけた
「働く意味」

2020 年　　ダイヤモンド社

川口　加奈（著）

[800-2]

著者経歴紹介
1991年大阪府に生まれる。
14歳でホームレス問題に出会い、ボランティア活動を始める。17才で米国ボランティア親善大使に選ばれワシントンD. C. での国際会議に参加。
大学在学中の2010年に、NPO法人「Homedoor」を設立。2011年、シェアサイクル事業を開始。2018年、宿泊も可能な施設を開設。

中学生時代に参加した「炊き出しボランティア」で気づいた。
おにぎりを渡したおっちゃんの服があちこち破けていて、思わず自分のコートを渡そうとしたら、その後にも延々と並ぶ同じような人が見えた。「おにぎりを渡してもコートを渡しても根本からの解決になっていない。」と。以来、おっちゃんたちが再び働けるような仕組みを考え続け動き続けた。
本書は、その活動の経緯を、著者が親しみを込めて「おっちゃん」と呼ぶホームレスの人たちとの大阪弁のやりとりを交えて語る１５年間の記録。第１部は、著者自身の「働く意味」を見つけていく様子、第２部はみんなの「働く意味」を見つけていく様子が語られている。

学校のボランティア部に入って「夜回り活動」も体験し、過酷なホームレスの実態を知っていく著者。
ワシントンＤＣの国際会議での発表に対して質問があった。「あなたの活動でホームレス問題にどんな変化があったの？」。
そのとき、ホームレス当事者たちの現状は何も変わっていないことを痛感した。

「わしにもできる仕事ないかな」夜回り活動のときひとりのおっちゃんに言われた「ひとこと」がずっと心に引っかかっていた。次にそこを訪れるとその人は亡くなっていた。もう一度やり直したい、そんな思いが叶わず亡くなっていくような社会はいやだと、ここに駆け込んだらなんとかなる「夢の施設の間取り図」を描いた。
大学時代、友人２人と団体を設立し本格的に夢に向かって活動を開始したが、活動を進めるうちに２人が離脱。ついに一人で活動することに…。
ホームレス問題の解決に向けて活動を続けるなかで、高いハードルを一気に飛び上がるのではなく、相談者一人一人が希望する支援を受けながらホームレス状態からステップアップし、仕事をして自立できるシステムが必要だと気づき、その段階を６つのチャレンジとして、一つずつ、支援を充実させていくことを計画した。
まずは「仕事作り」をと、知恵を絞り実証実験を繰りかえして企業や行政の窓口を回り続け、シェアサイクル会社「Habchari（ハブチャリ）」を創設して事業を開始した。仕事をやり始めたおっちゃんたちは、見違えるようにイキイキし始めた。挑戦することへの不安がなくなれば、みんなが自分なりの「働く意味」を追求できるようになる。それは挑戦することでのみ見つけられるものなのだ。そして、２０１８年には、高校時代に夢に描いた宿泊可能な施設も開設した。

著者の『やり続ける』才能は圧巻だ。やり続けなければならない状況を作り、夢中で駆け抜けて来たのだ。その姿が周りの人に伝わり、次々と必要なときに、必要なサポーターが現れた。団体設立は友人に引っ張られてスタートしたが、一人になってしまったとき、そこに現れたのは、「みんながいなくなっても、私はいなくならないですよ」という、今も最も頼りになる仲間。

ホームレス状態の人は、今や「おっちゃん」だけにとどまらない。こんな時代だからこそ著者が設立した団体の果たす役割は大きくなり、ますます必要とされている。けれど本当は、特別な支援がなくても、だれもが安心してやり直しのできる社会になるのが一番だ。道は遠くてもそんな社会を目指したい。（ルナ）

男女共同参画センター図書コーナーには、性別年齢にかかわらず、一人一人の生き方を応援する多くの資料が揃っています。
気軽に立ち寄って書棚を覗いてみませんか。やさしく寄り添ってくれるたくさんの本たちが、みなさんをお待ちしています。